上高井教育会報

第208号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会理事長　佐藤訓行
編集人　会報編集委員長　市ノ瀬淳一
印刷所　須坂新聞社

授業力と人間力

上高井教育会理事長　佐藤訓行

近年、教師の不祥事、指導力不足教員の増加、そして児童・生徒の学力低下等が多数報道され、教育再生の下、様々な教育改革が進められている。

文科省の省令案を見ても指導要領が全面改定され、小学校は平成二十三年度、中学校は二十四年度より新しく施行される。その内容も①言語活動の充実、②理数教育の充実、③伝統や文化に関する教育の充実、④道徳教育の充実、⑤体験活動の充実、⑥外国語教育の充実が掲げられ、授業時数の一割増、小学校五・六年での外国語活動の導入等、教科への改善も迫られている。

一方、国際学習到達度調査（PISA）で、毎回世界トップクラスの成績を上げているフィンランドは、日本より総授業時数は少なく、授業はより教師個人の裁量に任され、教員評価制度もないという。教員資格に修士号が義務付けられ、高い専門知識を学ぶ体制も確立されている。一学級の児童・生徒数も少なく、子ども一人ひとりへの細やかな指導が徹底され、国民からの尊敬も厚いと伝えられている。

そして、国際学習到達度調査が求めている学力は、正に日本の現学習指導要領が掲げている「自ら学び、自ら考える力」と同等であるが、日本の子どもの科学への関心や意欲は五十七ヶ国中、最低水準であり、読解力の分野は前回調査で八位が、今回は十四位と下がっている。さらに、数学的・科学的な応用力が著しく弱く、これは、四十三年ぶりに実施された全国学力テストの結果と同様で、知識を活用する力に課題があることが分かってきている。

さて、私達教員が再確認し、前進させなければならないことは、上高井教育会の先輩方が会誌等で述べられている「表紙を変えても中身が変わらなくてはだめだ。中身を変えるのは教師の力量だ」という内容ではないだろうか。全てがこれに導かれ、言い尽くされてしまう気がしてならない。

児童・生徒は一時間、一時間の授業や活動の中で、考え、比較し、課題を持って成長していく。それは二度とない授業の創造であり、「教師」という職業がその子の人生に大きく影響を与えることを意味している。だからこそ、職能向上を目ざし、自主的な課題を自らが持って、「自己研修・研鑽に努めよ」との教えが、先輩達から脈々と引き継がれて来ているのである。

授業のもとは、学級づくり

子ども達が毎朝、毎日通い、生活する学校。また、その子の人生の基礎を教え、導き出す教師と学級。子ども達は、そこで日々学び、生活する。よってこれらの影響は大であり、仲間と級友と環境が良い学級（よい学級経営）は、日々生活する一人ひとりの子にとって大変重要な居場所となる。まず居場所が安定し、そこから授業が展開される。そして、我々教師の力量ある授業により、よい授業←高い学力←より高い学力へと、一人ひとりの子どもが身に付けていくのではないだろうか。このことはどんな時代でも、どんな改革であっても、変えることのできない「不易」なることであり、脈々と受け継がれなくてはならないことと信じている。

その意味で、上高井教育会の特徴に、会員、全員参加による研究委員会がある。この会で自己研鑽し、互いが職能向上を目ざし、「啐啄同時」の目、心、姿で職場・教育会を盛り上げていきたい。

音楽同好会による合唱の発表

最後に、教育会の歩みの一ページに本年度の成果が積み上げられんことを期待し、前向きに邁進しましょう。

（豊丘小）

教育会だより

4・1　選挙公示（役員選挙）
4・8　第1回代議員会
第3回選挙管理委員会
4・9　教育会役員選挙（正副理事長、理事、監事）
第4回選挙管理委員会
4・11　第1回理事会
4・14　平成19年度会計監査会
4・15　第2回代議員会（信教常任、代議員、補欠員、補充員の承認）
第5回選挙管理委員会
4・23　第2回理事会
4・24　研究委員長会
5・2　研究総委員会・同好会発足（於 須坂小学校）
5・8　研究委員会・同好会世話係・委員長・会長会
上高井教育研究集会三団体発足会
5・14　新任者歓迎会（於 須坂迎賓館）
5・15　研究推進委員会①
5・23　総会前日準備
5・24　教育会通常総会・講演会（於 須坂市文化会館）
○平成19年度会務報告並びに決算の承認
○平成20年度事業計画並びに予算の承認
○会員意見発表　須坂市小学校社会科副読本3・4年生用 編集委員6名表題『わたしたちの須坂市』編集記
○講演　講師 益地憲一 先生（信大教授）
演題「確かな学力を育む授業を生み出す教育力」
5・31　第122回信濃教育会総集会（於 塩尻市文化会館）
上高井教育会より40名出席
6・3　同好会②
6・4　第3回理事会
6・10　第3回代議員会
6・17　郡研究推進委員会②
7・4　臨時理事会
7・10　教育七団体結成会
7・12　同好会③
7・18　上高井教育会会報第208号発行
7・22　研究委員長会・研究企画委員会

「確かな学力を育む授業」を生み出す教育力

研究委員会会長　山崎悦夫

研究委員会が現在の形で発足した昭和三十七年の上高井教育会報第二号で、神林清先生は次のように述べておられます。「教科研究活動は、職能向上を目的とする教育会の事業の中核をなす重要なものである」と。まさに研究委員会と同好会は教育会の両輪です。

さて、今年度も中心講師を信州大学教育学部の益地憲一先生にお願いし、昨年度よりの継続で「確かな学力を育む授業の創造」をテーマに研究を推進していくこととなりました。本年度の研究の特徴は、①会場校に任せるのでなく、各委員会が主体となり会場校と連携して研究を進めること、②現場の実践から子どもの実態に合ったつけるべき力を決めだし、創意工夫して授業改善を図ることにあります。そのねらいを達成し、会員の力となる研究活動とするために次のような方法で推進することとしました。

一、会場校は、委員会で主体的に決定する（よって学校体制を取ることはしない）。

二、委員会で授業者と連携して研究を推進する。

三、指導者は郡内の適任者に依頼する（評価される授業でなく自らの困り感や願いに迫る授業でありたい）。

今年度の研究が益地先生の提唱される「学習者の主体的な学びと学び合いの場」となる授業の創造を目指して、会員自らのための特色ある郡研委員会活動が展開されるよう期待致します。

（井上小）

昨年度高山小学校で行われた研究授業の様子

本校の中核活動

「花・福祉・歌声の響き合い」

― 仁礼小学校 ―

本校、須坂市立仁礼（にれい）小学校の学校目標は、「心豊かに自ら学ぶ子どもの育成」である。「全ての子ども達は一人一人よさをもっている。そのよさをほめ・認め・励まして伸ばしたい」という想いを具現するために、花・福祉・歌声を中核活動として、子ども達一人一人のよさを引き出すようにしている。そして、継続性・忍耐力・協力性・命の大切さ・思いやりの心を学ぶことを主な目的として、全ての子ども達が、一年を通して友達や先生と一緒に花作りをしている。ただ単に花を作るのではなく、総合的な学習の時間や生活科とも関係づけて、花作りでつける力を明確にして計画・実践・反省のサイクルを大切にしている。

四月は鉢花のない時期である。しかし、本校では冬の間に一人一鉢で育てたパンジーやビオラがあるので、それらの花を通学路の道沿いに移植する。自分たちが冬の間に育てた大切な花を、今度は地域の方々に見て楽しんでいただくのである。

五月に種を蒔くところから本校の本格的な花作りがスタートする。小さな種から芽が出たときに、子ども達は命の不思議さに感動する。ある程度の大きさに成長すると、各学年の花壇に移植する。

暑い夏の日の水くれや草取りは大変である。しかし、自分たちの苦労が報われ、きれいな花が咲いたときの気分は格別である。花作りは、体験を通して学ぶことの大切さを教えてくれる。

咲いた花は自分たちで楽しむだけではなく、グリーンアルム・コミュニティー・須坂荘等に届け、地域の方々やお年寄りの方々に喜んでいただいている。このようなことから、福祉面でのグリーンアルムとの交流にも子ども達は素直に取り組んでいける。そこで歌う歌の練習も花作りから広がっている活動である。

昨年度の六年生は、自分たちが担当した花壇に七色の虹の花を咲かせた。芝生の緑の中に咲いた七色の虹の花は見事であった。

そして、秋から春にかけて、また一人一鉢で花を作る。パンジーやビオラを種から育てるのである。このようにして子ども達は、一年中花と関わり、花作りから色々なことを学ぶのである。

このような活動が認められて、昨年度「信州豊かな環境づくり県民会議」から長年の花作りを表彰された。また、昨年度の児童会がグリーンアルムに贈った入浴用の車イスが話題になり「小さな親切運動」から「実行章」をいただいた。今年度の児童会長は「先輩達が地域の人達の役に立とうと一生懸命に活動してきたから表彰してもらえたのだと思う。これからも先輩を見習い、地域の皆さんと全校児童で仲よく活動していきたい」とお礼の言葉を述べた。子ども達は花・福祉・歌声の活動を通してよさを引き出し、多くのことを学んでいったのである。今年は、子ども達一人一人の心の中にどんな花が咲くであろうか。本校の一番の楽しみである。

（丸山　潔高）

本当の「楽しい」

同好会会長　幅　明洋

二年生のN君が、手にした網を指さした。ザリガニが入っている。「すごいな。自分で捕ったんだね」の声に、言葉にならない思いを伝えようとでもするように、吸い込んだ息をホッと吐き出した。

緘黙傾向のN君だが、このときは、「ザリガニがヒルをつかんでるよ」「これ、ぼくの」…。いろんな言葉で、友だちに「嬉しい」を発信する。『捕りたい』『用水のトンネルの中にきっとザリガニがいる』『水草の中に網を入れてみるか』きっと、N君なりに様々見通してやってみた。結果、見事に手に入れることができた。知恵、経験の結合、結末への見通し、手応え、分析・判断、受信して貰える嬉しさ等々、きっと何にも代え得ないN君の一時間だった。

子どもたちの学習の元肥となるべき豊かな生活が、社会の合理化の中で次第に痩せ細り、その結果、子どもたちの理解や応用力に影響するだけでなく、ともすれば、よりよく生きたい思いすら失わせかねない状況。自己の願いを実現するための材料や場、時、手段等を総合的に見通し、決断し、選択・実践できるたくましい子どもを育てるためには、私たち自身がまず、感性と素養と度量と経験を豊かにしていくことが不可欠であるに違いない。

（日野小）

「身体で良さを実感する」

上高井の総合的な学習を考える同好会

竹前研一

今年の同好会員は、七名と少ないですが、熱き思いを持つ七名で、活動を盛り上げていきたいと思います。

私たちの同好会は、教師である同好会員一人一人が、実際に様々な「もの」「こと」「人」と関わることを通して、その良さを実感するという基本精神のもと活動しています。そして、その実感こそが本物の授業づくりをするための土台となると考えています。

昨年度は、井上に畑を借り、野菜を栽培しました。新鮮でおいしい野菜を食し、作物を栽培する良さを実感しました。

まだ、今年の活動は決定していませんが「真剣な遊び」をテーマに活動していきたいと思います。子どもたちの遊びには大きな意味があります。そして、教師自身が遊びの良さを実感していないと、その遊びを評価することはできません。そのため今年度、同好会では、上高井の自然の中に入り、真剣に遊び、同好会員全員が、野での遊びの良さを実感したいと思います。

（豊洲小）

本校の宝㊷ 小布施中学校

校宝「校歌」

小布施中学校は、昭和三十三年に統合されて、現在に至っています。その年、石森延男先生作詞、木下保先生作曲によって校歌が制定されました。それ以来、この校歌は、半世紀にわたり、九千人に近い同窓生によって歌い継がれてきました。

昨年度、創立五十周年を迎えるにあたり、この機を"二度とない教育の機会"ととらえ、"全教育活動の中で生徒主体に活動を展開する"という基本方針を打ち立てました。そして、これらの中の一つである総合的な学習の時間において、三年生が校歌の学習に挑みました。様々な側面から校歌を追究するにあたり、校歌をより豊かに表現するには合唱曲に編曲したいとの思いに行き着きました。途中経過は略させていただきますが、最終的には「マイバラード」の作曲者である松井孝夫先生に編曲していただきました。

そして、五十周年記念式典の中で、三年生によって無伴奏・混声四部合唱の校歌が初公開されました。静寂の中に、きれいなハーモニーが響き渡りました。三年生が歌い終えた後、拍手の起こる中、年輩の卒業生の何人もが涙するという評価をいただきました。それは、校歌が、歴史の節目に混声四部合唱曲として新たに生まれ変わった瞬間でした。家の宝を家宝と言うなら、学校の宝を校宝と言ってもいいと思います。我が校の校宝は"故きを温ね、新しきを求めた、校歌"であります。

（校長　久保田　博）

「松井孝夫先生の指揮による校歌合唱」（本年7月）

小さな挑戦者に学ぶ

山岸　信之

今年度の子ども自転車大会の練習に参加した本校児童は五年生四名、六年生四名。計八名だが、七名が遠距離通学の児童たち。バスで通う児童が四名。徒歩通学範囲で最も遠方である牧地区から三名。二年間このメンバーで練習してきたため、チームワークはとても良い。しかし、バスの発着時間と遠方への徒歩通学の関係から、朝と放課後の練習時間は限られた。特に昨年度は四年生と五年生が四名ずつで、身長が足りなくて足が床に着かない児童や、テキストの文字をよく読めず、意味も理解できない児童もいた。

でも本校では全員が立派な選手。少ない練習時間の中で技能を少しでも向上し、テキストの内容を理解するにはどうしたら良いか全員で考え工夫に努めた。また全員が他校の技術のすばらしさを一昨年と昨年の県大会で学び、「勝つ喜び」と「負ける悔しさ」を感得してきた財産がある。

八名の選手たちには、共通の願いがある。ダレがちになったり、塾や社会体育と重なったりの日々の練習を、全員の情熱や執念で取り組み、励まし合い、どこまで自分たちの力が通じるのか試したい。そして先輩たちの築いてきた伝統を可能な限り後輩達にも伝えたいと！がんばれ八名！

（高山小）

清涼談義

カット
旭ヶ丘小　牧田朋之

モザイク壁画制作記

水上　淳一

我が東中学校では、例年文化祭で生徒会主催の全校制作「モザイク壁画」に取り組んでいる。私は昨年生徒会顧問を担当したこともあって、その活動の中心で関わらせてもらった。文化祭三ヶ月前から本部会役員で壁画のデザインを話し合い、夏休み中に生徒会三役で「原画」を作成。二学期に入ってから、いよいよ全校生徒による制作がスタートした。

パソコンのソフトを使って原画を八色のドット絵に変換し、拡大したものをA4台紙、計約四百枚に出力。それぞれの台紙には一センチ四方の格子が印刷され、その一つ一つに「緑」「赤」というように色が指定されるという仕組み。この作業は生徒会顧問の私が引き受け、その間本部会役員は八色の折り紙を一センチ四方の大きさに一週間かけてひたすら切り続ける。こうして用意した一センチ四方の折り紙チップの総数は約二十万枚！これだけでもかなりの労力である。これをクラスごと分担してA4台紙に貼り付けていき、集まったものを役員で貼り合わせ、縦三メートル、横五メートルにもおよぶ見事なモザイク壁画が完成した。

開祭式で全校に披露したときは、全校で一つの作品を作り上げたという感動と充実感でいっぱいだった。（東　中）

平成20年度	県外視察者名簿（敬称略）上高井教育会				
	学校名	氏名	視察目的	視察方面	実施時期
1	栗ガ丘小	原　千恵	算数学習における友との学び合いと子どもの姿	東京芸大附属金井小	8月
2	高山小	亀岡俊範	算数科「活用する力」の育成	東　京	2学期
3	小山小	松澤裕子	学校カウンセリング	関東方面	2学期
4	〃	森下佳代	他県の教育カリキュラムとの比較	福井県	2学期
5	森上小	矢野　司	学び合いの授業づくり	愛知県	8月
6	〃	望月千恵子	伝える力・活用する力を育む指導法	東　京	6～7月
7	日滝小	瀧澤雅美	科学を作りあげる学びのデザイン	新潟大教育学部附属長岡小	10月
8	〃	橋詰久子	新しい時代を切り拓く心豊かでたくましい日本人を育成する学校教育の推進	山形方面	7月
9	〃	越　浩一	エネルギー教育シンポジュウム	富山県	7月
10	日野小	学力向上研究グループ	基礎学力向上に関する実践研究について	関　東	1～2学期
11	高甫小	大久保欽章	教育・学習・校務環境の多様化への対応	東　京	3月
12	〃	添谷里絵	視察校独自のカリキュラム、学力形成の取り組み	京都立命館小	2月
13	旭ヶ丘小	笠井弥生	社会科・生活科・総合における探求力と人間力	東京	7月
14	小布施中	大滝由紀子	教材開発「伝統を受け継ぐ前掛け文化」	東京方面	7～8月
15	〃	多田将希	今日の保健体育の現状・課題・指導法	東京方面	7～8月
16	相森中	小林里美	新しい時代を切り拓く豊かな心と実践力を育てる家庭科教育	大　阪	10月
17	〃	川上篤史	大平洋戦争の残したもの～大平洋戦争時における国民生活の様子から平和について考える～	東　京	7月
18	常盤中	黒岩和男	生きる力をはぐくむ科学教育～カリキュラムと実践～	京都市	1学期
19	墨坂中	藤原友二	先進的な取り組みをしている教科指導の実践研究	新潟県	10月中旬
20	東　中	中村　充	吹奏楽の指導	関東方面	2学期中

編集後記

会報・第二〇八号を計画通り、皆様にお届け致します。

今年度は「会員が手にして読みたくなる会報」を目ざし、以下の改善を図りました。

（一）写真を多用し、大胆に構成変更し読み易くする。

（二）「火ばち談義」のタイトルを冬季号とし、夏季号は「清涼談義」と改題する。

（三）原稿提出をメール送信のみとして迅速化を図る。

このような刷新にも関わらず、玉稿をお寄せ下さった皆様に心より感謝申し上げます。

出来映えはどうでしょうか。率直なご意見を、左記にお寄せ頂ければ幸いです。

委員長　市ノ瀬淳一（常盤中）
副委員長　嶋田　秀樹（旭ヶ丘小）
委　員　中村　文成（小布施中）
宮下　由美（常盤中）
米山　修一（井上小）
須加尾　隆（仁礼小）
栗林　孝成（豊丘小）
松澤　裕子（小山小）